

精神障がい者の地域生活を支えるための 多機関連携ネットワークのあり方に関する研究

～精神医療の標準化と身体科・精神科・介護スタッフの連携～

下村 裕見子 氏

北里大学医学部精神科学



要旨

精神医療を取り巻く課題を整理し、多職種多機関が協働する素地を作るために一堂に会した研修会を開催した。精神科スタッフ群は精神科内のチーム医療に課題を感じており、それ以外群では、在宅訪問（アウトリーチ）が不足しており、身体科や在宅チームと精神科スタッフとの連携が脆弱であると感じていた。その解決としてクリニカルパスは精神医療の標準化と可視化の進展をもたらし、精神科以外のスタッフとの情報共有に有効であるとの回答を得た。精神疾患のある人が身体科を受診しやすくなり、地域へ移行していくためには、精神疾患に対して抱かれやすい偏見が低減されることが必要になるが、偏見の背景には精神疾患に対する知識不足があると考えられた。患者の回復が促進される上では、転院や退院の時期が適正化されることが求められる。多職種多機関が一堂に会しての研修を通じ、精神疾患のある人の暮らしを支える地域の仕組みの醸成が期待される。

1.はじめに

精神医療の目標は、精神疾患のある人が病と付き合いながら支援につながり、回復と張り合いを得ながら地域で安心して暮らし続けることである。そのため医療だけでなく介護、福祉、行政、回復者としての当事者など、多くの人々がチームに関わることが求められる。そして当事者を含む全ての関わる人に可視化され、標準化された精神医療へアクセスできることが求められる。したがってクリニカルパスを活用することは精神医療と精神疾患のある人、家族に多くの恩恵をもたらすと期待されている。だが精神医療におけるクリニカルパスの理解や実践はまだ途についたばかりである。

本研究は、身体科・介護・精神科スタッフが共にクリニカルパスを学ぶ過程を通じて精神医療に触れ、退院調整・退院支援・地域移行の課題整理を行い、各職種の役割を理解することを目的に実施された。

2.方法

山形県立こころの医療センターならびに沖縄県立精

和病院にて多職種多機関での研修（精神科病院見学、クリニカルパス講義、第7次医療計画の見直し、退院調整に伴う事例検討会）を計4回（図1）行った。



図1 研修会 テキスト

精神医療や退院支援、一般医療と精神医療の転院時の課題整理、クリニカルパス有用性に関してグループワークならびに調査票を用いて確認した。

3.結果

精神科スタッフ群は「精神科内のチーム医療」に課題を感じていた。それ以外群は、「在宅訪問(アウトリーチ)」「身体科や在宅チームと精神科スタッフとの連携」の脆弱さを感じていた。在宅医療の課題では、「精神疾患のある人、家族の理解不足」「精神科スタッフの在宅移行への意識不足」「住居確保」が多く挙げられた。身体科への転院受け入れの課題に関するディスカッション(図2)では、「身体科スタッフの精神医療に関する知識不足」が「ケアの不安」へと繋がるという意見が多く取り上げられた。クリニカルパスを有用と回答(平成29年9月30日沖縄)した精神科スタッフはクリニカルパスに対して「治療目標が明確になる」、それ以外群では、「患者状態が把握しやすくなる」「身体科や介護スタッフへの情報提供として活用できる」と感じる傾向を強く認めた。解決のための対策として「精神科・身体科・介護スタッフが一堂に会した研修会」が有用であり、「情報共有ツール」としてクリニカルパスが活用されることが望ましいとの回答を得た。鶴岡(北)と沖縄(南)に大きな差異は認めなかった。

4.考察

人口の高齢化も相まって、精神・身体の双方に対して専門的な治療を要する患者が増加している。精神疾患のある人が適時、適切な身体の治療にアクセスできる仕組みが求められる。精神科の治療やケアの多くは多職種で行われるため、情報共有や目標共有が不可欠である。本調査からも精神疾患のある人の状態や治療目標を把握できずにいることが、地域における多職種多機関での医療ケア提供の障壁になっていると考えられた。精神医療における治療やケアの標準化と可視化をクリニカルパスによって実践することは、多職種多機関でのチーム医療を構成するツールとして有用性が高いと考えられた。またクリニカルパスはあくまでツールであり、集団学習(図2)は顔の見える関係構築となり相互理解・相互連携の一助となると考えられた。



図2 グループワーク

5.結論

本研修の開催は、身体科と精神科の連携の促進による身体科への転院の円滑化、精神疾患のある人の地域生活を支えるための多機関連携ネットワーク構築、適時の地域移行促進に対して、良好な影響を及ぼすと考えられた。そしてそのことは、精神疾患のある人と家族が、安心して医療やケアへアクセスしやすくなるための地域の仕組み作りに寄与することが期待できる。